

〔論文〕

長期的インターンシップ実習における 継続性／非継続性の要因に関する研究

— 保育・教育系学生の縦断的アンケート調査を手がかりに —

佐伯知子*

本論は、保育・教育職の養成段階における、長期的インターンシップ実習の継続性／非継続性の要因について検討するものである。具体的には、ある保育・教育者養成校の事例に注目し、同大学で3年次にインターンシップ実習が選択制となって以降、実習を選択した学生／しなかった学生（本論では、継続組／非継続組と呼んでいる）がそれぞれ、1・2年次のインターンシップ実習（必修）でどのような経験をしてきたのか、またどのような成果を実感してきたのか、縦断的アンケート調査をもとに検証した。結果、継続組と非継続組の違いとしては第一に、継続組の方が多くのことを経験し、学習成果を強く実感する傾向が高いという点、第二に、1年次から2年次への変化という面では、継続組では前向きな変化がみられる傾向が強いが、非継続組においてはそうした変化がみられにくいという点が明らかとなった。早期離職が問題視される保育・教育職において、本論で得られた知見を今後の学習支援に生かしていきたい。

キーワード：保育・教育者養成、長期的インターンシップ実習、継続性／非継続性

I はじめに

近年、保育・教育職における早期離職の問題は、極めて深刻な状況にある。保育・教育時間の延長、保護者支援や地域の子育て支援、他施設・機関との連携など、保育・教育者に要求される仕事内容が日々多様化・高度化・複雑化する中、また、非正規雇用をはじめ長時間労働や低賃金といった労働条件の厳しさが増す中で、保育・教育者として働き出したものの、早い段階で辞めてしまう事態が常態化しているのである。実際、保育者の就業実態に関する調査では、卒業後2年以内で約4割がいったん退職するなど、短期間の離職の実態が少なからず報告されている¹⁾。小学校以上の教員に関しては、現段階の早期離職率は保育職ほど高くないものの、時間外労働の多さやストレスを抱える教員の増加など働き続ける困難性は常に指摘されているところである²⁾。

もちろん、条件に見合わない職場を辞め、新たなステップを踏むことは一概に否定されるものではない。しかし、早期に離職する場合、基本的な知識や技能さえも十分に習得できていないことが少なくなく、個々人にとって再就職はもちろん、生涯にわたる職業キャリアの形成を難しくさせる可能性が高い。また、業界全体でみても人材育成に支障をきたすものであり、保育・教育の質の保障といった観点からも不安が残るといえる。このよう

*大阪総合保育大学 児童保育学部

に考えると、保育・教育者が就職後いかに仕事を継続させていくかということは、近年の保育・教育界における最重要課題といっても過言ではない。

では、この課題を解決していくためにはどうすればよいのか。これについては、現在の家庭・労働環境の改善をはじめ多方面からの取り組みが必要なことはいうまでもないが、より長期的な視点に立てば、保育・教育者の専門職教育のあり方を見直すことも不可欠といえるだろう。特に養成の段階から、学生が保育・教育者として長いキャリアを生き抜くための知恵やスキルを身につけていけるよう、一貫した支援体制を整えることが極めて重要であると思われる。

こうした点をふまえ、本論では、仕事の継続性を見据えた養成段階の具体的システムとして、長期的インターンシップ実習の可能性に注目したい。周知の通り、学生の段階で現場に出て就業体験するインターンシップ実習は、志望先を決め、仕事への意欲を高める上で非常に効果的なシステムだが、実習期間が長期にわたる場合はさらに、「体験学習」から一歩踏み込んだ、仕事を始める上での覚悟や仕事を継続する力を育てる機会にもなると考えられる。もちろん、学生として置かれている状況と社会人としての立場とは単純に同列に語れるものではないが、長期的インターンシップ実習において学生が直面するさまざまな事象を把握することは、効果的な学習支援につながるものであり、後々の仕事の継続性を担保するひとつの鍵になるものであると思われる。

そこで以下より、保育・教育者養成校における長期的インターンシップ実習の事例を取り上げ、学生の実習内容と成果の様相をとらえていくこととする。そうすることで、仕事の継続性を見据えた養成段階での学習支援の内容と方法について示唆を得たいと考える。

II 分析事例の特色と調査の概要

1 分析事例の特色と現状

本論で事例として取り上げる大阪総合保育大学は、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭を養成する大学であり、2006年の開学時より全学年を通じた体系的なインターンシップ実習の機会を設けている。保育・教育の現場で経験を重ねることで、学生が大学での学びを実践的に理解するだけでなく、使命感・責任感・子どもへの愛情などの大切さに気づくとともに、対人関係能力や指導力の向上を図ることが目指されている³⁾。

具体的には、各自が年度始めに希望した現場（保育所・幼稚園・小学校のいずれか）で1週間に1日、1年間にわたり実習を行なう。全国の平均的なインターンシップ実習と比べると⁴⁾、1年次の段階から実習が行なわれる点、実習期間が定期的かつ長期にわたる点で特徴的といえよう。なお、大学側は、実習先の開拓や現場との連絡調整はもちろん、学生が週1日現場に出られるような時間割編成、実習の事前指導（目的・心構えなど）、1年次からの少人数ゼミにおける情報交換および指導、日々の実習日誌（毎回の実習後にゼミ担当者に提出する）の添削指導、学生同士の交流会の開催、年1・2回の訪問指導などを行っており、個別の課題やニーズに即した指導体制を整えている。

表1 インターンシップ実習参加人数と参加率（2011年度～2014年度）

(単位:人)

	2011年度				2012年度				2013年度				2014年度			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
保育所	48	18	5	5	61	10	2	6	25	17	6	5	5	28	9	9
幼稚園	34	39	15	9	46	31	20	4	78	44	10	10	109	26	12	8
小学校	12	45	32	11	18	51	27	6	30	60	15	9	25	79	22	8
その他	0	0	7	2	0	1	4	3	1	1	0	1	0	0	2	0
参加者計	94	102	59	27	125	93	53	19	134	122	31	25	139	133	45	25
総学生数	94	102	103	109	125	93	110	105	134	122	97	113	139	133	125	101
参加率*	100.0%	100.0%	57.3%	24.8%	100.0%	100.0%	48.2%	18.1%	100.0%	100.0%	32.0%	22.1%	100.0%	100.0%	36.0%	24.8%

* インターンシップ実習参加者を、各年度4月時点での総学生数(休学者のぞく)で割ったもの。

この長期的インターンシップ実習について本論で注目したい特色は、1・2年次と3・4年次でシステムが大きく異なる点である。2年次までは必修科目であるが、3年次以降は、時間割の配慮や実習先の斡旋、実習日誌の指導などは継続して行なわれるものの、参加は学生自身の選択に委ねられるのである。そのため1・2年次では100%の学生が参加しているが、3年次以降になると参加者は大幅に減少する傾向にある。実際、過去4年間のインターンシップ実習参加人数の一覧をみると、平均参加率は3回生が43.4%、4回生が22.5%となっている(表1)。

こうした継続/非継続の要因となるものはそれぞれ何であろうか。実習を継続する学生/しない学生にはどのような違いがあるのだろうか。すでに述べたように、本論は、保育・教育職における仕事の継続性の問題から出発するものである。それを考えるための手がかりとして、3年次以降変わるこのインターンシップ実習システムにおいて、実習を継続する学生/しない学生それぞれの、それまでの実習経験や学習成果の違いについて比較検討していきたい。

2 調査の概要

以下、長期的インターンシップ実習の継続/非継続の要因について、同大学で行なわれた学生アンケート調査を参照し分析をすすめる。

(1) 時期と対象者

本論で参照するアンケート調査は、毎年度1月下旬～2月上旬にかけて、大阪総合保育大学のキャリア支援部主導で全学生を対象として行なわれている、当該年度のインターンシップ実習に関する調査である。より具体的には、2011・2012年度入学者の2学年分について、それぞれが1・2年次の時点に行われた調査を参照している。

なお、筆者が同調査を参照する目的は、学生自身が3年次で継続/非継続を決めた要因について、1・2年次の時点のアンケート調査から分析するためである。よって、1・2年次での休学者・退学者はもちろん、単位未修得により「やむをえず」3年次も実習を選択している学生(2011年度入学生6名、2012年度入学生6名)については、以下の調査

結果および考察対象から除外している。結果として、考察対象者は203名（2011年度入学生87名（総学生数の93.5%）、2012年度入学生116名（同95.1%））となっている。

(2) 質問内容

表2にあるように、質問項目は、【A】実習経験（「体験したことについて」19項目）、【B】学習成果（「実習を通して『理解した・身についた』と思うこと」11項目）の大きく2つから成っている。項目の具体的内容は、大阪総合保育大学のインターンシップ実習の目的および、キャリア支援部の担当者（主に保育・教育の現場経験者から成る）間での議論をふまえ、改訂が重ねられてきたものである。

表2 質問項目一覧

【A】体験したことについて	【B】実習を通して「理解した・身についた」と思うこと
① いろいろな子どもと関わった ② 特定の子どもと継続的に関わった ③ 先生の授業や保育の様子を見ることができた ④ 休憩時に子どもと一緒に遊んだ ⑤ 子どもへの対応に戸惑ったり悩んだりした ⑥ 子どもへの対応について先生に相談した ⑦ 1人で子どもの保護者に対応する場面を見た ⑧ 先生が保護者に対応する場面を見た ⑨ 行事に参加した ⑩ 行事の手伝い（運営・準備等）をした ⑪ 先生とともに授業や保育をした ⑫ 保育案や指導案を見る（作る）機会があった ⑬ 先生の会議（打ち合わせ）で指導方法を話し合った ⑭ 一斉保育や授業を1人で行う機会があった ⑮ 反省会やケース会議等に参加した ⑯ 学習に必要な環境づくり・教材づくりに関わった ⑰ 子どもの下校後、片付けや掃除等の仕事をした ⑱ 子どもの発達や生活の様子を教えてもらった ⑲ 教材や保育内容について具体的に教えてもらった	① 子どもの特性や生活の様子を学んだ ② 守秘義務の必要性を学んだ ③ 保護者への対応で初期対応の大切さを学んだ ④ 実習先と他の機関・施設との連携について学んだ ⑤ 先生（将来）としての適切な言動や支援の仕方を学んだ ⑥ 実習先の運営方針に沿って行動できた ⑦ 実習先の先生や職員の人と積極的に関わった ⑧ 実習先の先生や職員の人と適切な言葉遣いで話すことができた ⑨ 自分なりの目標をもって実習を行なった ⑩ 学んだことを具体的に実習記録に記録できた ⑪ インターンシップを経験して自分自身成長した

Ⅲ 調査の結果と考察 一実習継続組／非継続組の違いに着目して一

ここでは、3年次で実習の継続を選択した学生／しなかった学生（以下、継続組／非継続組と呼ぶ）がそれぞれ、1・2年次の時点でどのような実習経験をしてきたのか、またどのような成果を実感してきたのかを分析する。なお、アンケート調査は毎年度末に継続的に行なわれているものであるため、1年次から2年次にかけての認識・行動の変化についても注目していきたい。

1 継続組／非継続組の割合と実習先の選択状況

質問への回答結果を考察する前に、継続組／非継続組ごとの基本的な特徴について確認しておきたい。まず、考察対象者203名のうち継続組は3割弱となっている。性別ごとに見ると、女子の継続組が33.6%なのに対し、男子の継続組は13.7%と低調である（図1）。そもそもの絶対数が女子の3分の1程度であることを考えても、男子の参加人数が極めて

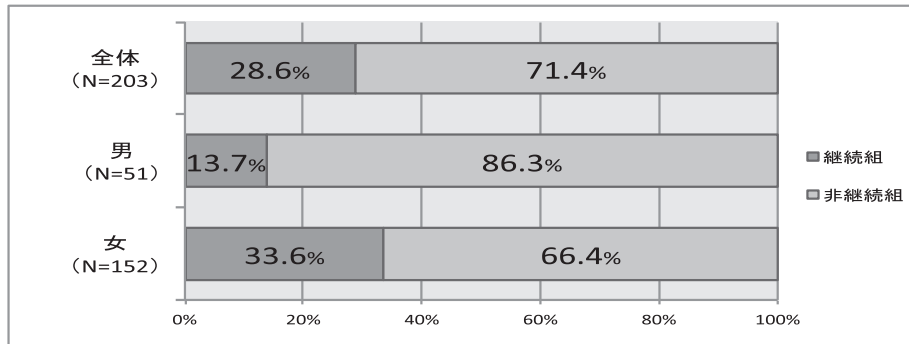


図1 継続組／非継続組の割合（男女別）

少ないことがわかる。

次に、継続組／非継続組が1年次・2年次で保育所・幼稚園・小学校のいずれの実習先を選択しているかをみておきたい（前述の通り、大阪総合保育大学のインターンシップ実習は1年ごとに実習先を変更することができる）。図2にあるように、全体的な傾向としては、1年次は保育所が半数程度で小学校が1割強であるが、2年次になると割合が逆転している。幼稚園は学年を通じて3分の1程度と一定した学生が選択する傾向にある。継続／非継続の違いをみると、学年を通じて継続組の方が保育所を選択する傾向がやや高く、非継続組の方が小学校を選択する傾向がやや高い。幼稚園については、継続組は2年次には微増して小学校と同じ割合になっているが、非継続組では減少し小学校と20ポイント以上差がついている。

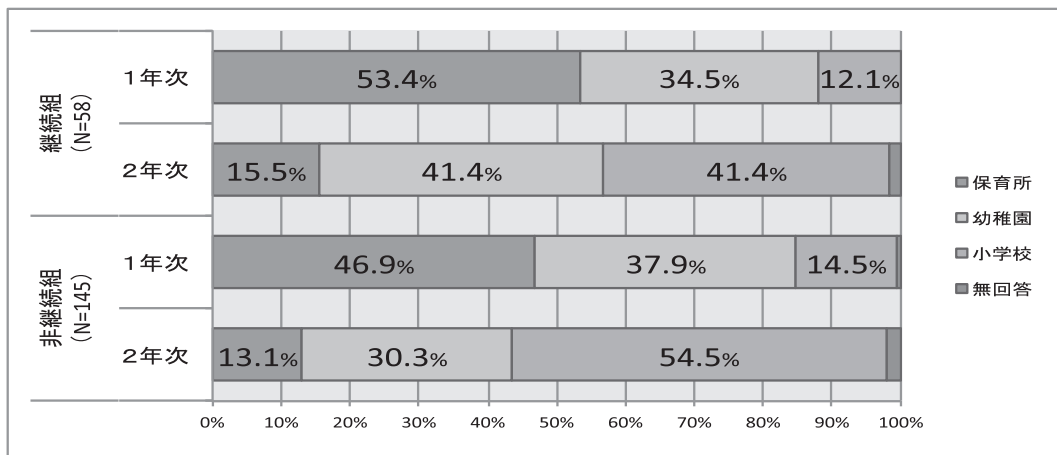


図2 1年次・2年次の実習先（継続組／非継続組別）

では、以上の傾向を念頭に置いた上で、質問への回答結果をみていきたい。

2 実習経験

まず、1年間のインターンシップ実習で学生が経験した内容について（「体験したことについて」）具体的にみていきたい。質問は19項目であり、回答の選択肢は「多かった」「ふつう」「多くなかった」「まったくなかった」の4項目となっている。表3・表4はそれぞれ、継続組と非継続組の回答結果を学年別に一覧にしたものである。

表3 継続組、インターンシップで体験したこと（学年別）

(N=58)(単位:人)

	1年次					2年次				
	多かった	ふつう	多くなかった	まったく なかった	無回答	多かった	ふつう	多くなかった	まったく なかった	無回答
① いろいろな子どもと関わった	47 (81.0%)	9 (15.5%)	2 (3.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	40 (69.0%)	15 (25.9%)	2 (3.4%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
② 特定の子どもと継続的に関わった	24 (41.4%)	22 (37.9%)	9 (15.5%)	3 (5.2%)	0 (0.0%)	27 (46.6%)	23 (39.7%)	6 (10.3%)	1 (1.7%)	1 (1.7%)
③ 先生の授業や保育の様子を見ることができた	52 (89.7%)	5 (8.6%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	47 (81.0%)	10 (17.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
④ 休憩時に子どもと一緒に遊んだ	45 (77.6%)	5 (8.6%)	3 (5.2%)	3 (5.2%)	2 (3.4%)	40 (69.0%)	11 (19.0%)	2 (3.4%)	3 (5.2%)	2 (3.4%)
⑤ 子どもへの対応に戸惑ったり悩んだりした	42 (72.4%)	14 (24.1%)	2 (3.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	33 (56.9%)	24 (41.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
⑥ 子どもへの対応について先生に相談した	10 (17.2%)	26 (44.8%)	21 (36.2%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)	20 (34.5%)	21 (36.2%)	15 (25.9%)	1 (1.7%)	1 (1.7%)
⑦ 1人で子どもの保護者に対応する機会があった	3 (5.2%)	8 (13.8%)	24 (41.4%)	23 (39.7%)	0 (0.0%)	6 (10.3%)	7 (12.1%)	23 (39.7%)	21 (36.2%)	1 (1.7%)
⑧ 先生が保護者に対応する場面を見た	37 (63.8%)	13 (22.4%)	5 (8.6%)	3 (5.2%)	0 (0.0%)	25 (43.1%)	16 (27.6%)	13 (22.4%)	3 (5.2%)	1 (1.7%)
⑨ 行事に参加した	34 (58.6%)	13 (22.4%)	7 (12.1%)	4 (6.9%)	0 (0.0%)	26 (44.8%)	22 (37.9%)	8 (13.8%)	1 (1.7%)	1 (1.7%)
⑩ 行事の手伝い(運営・準備等)をした	34 (58.6%)	15 (25.9%)	1 (1.7%)	8 (13.8%)	0 (0.0%)	31 (53.4%)	16 (27.6%)	9 (15.5%)	1 (1.7%)	1 (1.7%)
⑪ 先生とともに授業や保育をした	24 (41.4%)	23 (39.7%)	6 (10.3%)	5 (8.6%)	0 (0.0%)	15 (25.9%)	25 (43.1%)	11 (19.0%)	6 (10.3%)	1 (1.7%)
⑫ 保育案や指導案を見る(作る)機会があった	5 (8.6%)	6 (10.3%)	11 (19.0%)	36 (62.1%)	0 (0.0%)	7 (12.1%)	12 (20.7%)	12 (20.7%)	26 (44.8%)	1 (1.7%)
⑬ 先生の会議(打ち合わせ)で指導方法を話し合った	2 (3.4%)	7 (12.1%)	11 (19.0%)	38 (65.5%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)	7 (12.1%)	11 (19.0%)	38 (65.5%)	1 (1.7%)
⑭ 一斉保育や授業を1人で行う機会があった	1 (1.7%)	6 (10.3%)	7 (12.1%)	44 (75.9%)	0 (0.0%)	3 (5.2%)	7 (12.1%)	12 (20.7%)	35 (60.3%)	1 (1.7%)
⑮ 反省会やケース会議等に参加した	3 (5.2%)	5 (8.6%)	16 (27.6%)	34 (58.6%)	0 (0.0%)	6 (10.3%)	10 (17.2%)	9 (15.5%)	32 (55.2%)	1 (1.7%)
⑯ 学習に必要な環境づくり・教材づくりに関わった	18 (31.0%)	18 (31.0%)	14 (24.1%)	8 (13.8%)	0 (0.0%)	17 (29.3%)	17 (29.3%)	13 (22.4%)	10 (17.2%)	1 (1.7%)
⑰ 子どもの下校後、片付けや掃除等の仕事をした	33 (56.9%)	9 (15.5%)	4 (6.9%)	12 (20.7%)	0 (0.0%)	28 (48.3%)	16 (27.6%)	11 (19.0%)	2 (3.4%)	1 (1.7%)
⑱ 子どもの発達や生活の様子を教えてもらった	20 (34.5%)	30 (51.7%)	8 (13.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	28 (48.3%)	25 (43.1%)	4 (6.9%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
⑲ 教材や保育内容について具体的に教えてもらった	13 (22.4%)	24 (41.4%)	16 (27.6%)	5 (8.6%)	0 (0.0%)	16 (27.6%)	23 (39.7%)	16 (27.6%)	2 (3.4%)	1 (1.7%)
平均	24 (40.6%)	14 (23.4%)	8.8 (15.2%)	12 (20.6%)	0.1 (0.2%)	22 (37.7%)	16 (27.9%)	9.3 (16.1%)	9.6 (16.5%)	1.1 (1.8%)

表4 非継続組、インターンシップで体験したこと（学年別）

(N=145)(単位:人)

	1年次					2年次				
	多かった	ふつう	多くなかった	まったく なかった	無回答	多かった	ふつう	多くなかった	まったく なかった	無回答
① いろいろな子どもと関わった	113 (77.9%)	31 (21.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.7%)	94 (64.8%)	43 (29.7%)	5 (3.4%)	0 (0.0%)	3 (2.1%)
② 特定の子どもと継続的に関わった	47 (32.4%)	70 (48.3%)	27 (18.6%)	0 (0.0%)	1 (0.7%)	62 (42.8%)	67 (46.2%)	12 (8.3%)	1 (0.7%)	3 (2.1%)
③ 先生の授業や保育の様子を見ることができた	121 (83.4%)	19 (13.1%)	4 (2.8%)	0 (0.0%)	1 (0.7%)	110 (75.9%)	26 (17.9%)	6 (4.1%)	0 (0.0%)	3 (2.1%)
④ 休憩時に子どもと一緒に遊んだ	108 (74.5%)	15 (10.3%)	9 (6.2%)	9 (6.2%)	4 (2.8%)	101 (69.7%)	29 (20.0%)	6 (4.1%)	5 (3.4%)	4 (2.8%)
⑤ 子どもへの対応に戸惑ったり悩んだりした	95 (65.5%)	41 (28.3%)	8 (5.5%)	0 (0.0%)	1 (0.7%)	78 (53.8%)	55 (37.9%)	8 (5.5%)	1 (0.7%)	3 (2.1%)
⑥ 子どもへの対応について先生に相談した	37 (25.5%)	56 (38.6%)	41 (28.3%)	10 (6.9%)	1 (0.7%)	36 (24.8%)	61 (42.1%)	33 (22.8%)	11 (7.6%)	4 (2.8%)
⑦ 1人で子どもの保護者に対応する機会があった	10 (6.9%)	30 (20.7%)	48 (33.1%)	55 (37.9%)	2 (1.4%)	9 (6.2%)	17 (11.7%)	43 (29.7%)	73 (50.3%)	3 (2.1%)
⑧ 先生が保護者に対応する場面を見た	93 (64.1%)	37 (25.5%)	12 (8.3%)	2 (1.4%)	1 (0.7%)	50 (34.5%)	53 (36.6%)	31 (21.4%)	8 (5.5%)	3 (2.1%)
⑨ 行事に参加した	71 (49.0%)	39 (26.9%)	19 (13.1%)	15 (10.3%)	1 (0.7%)	57 (39.3%)	47 (32.4%)	19 (13.1%)	19 (13.1%)	3 (2.1%)
⑩ 行事の手伝い(運営・準備等)をした	74 (51.0%)	34 (23.4%)	24 (16.6%)	12 (8.3%)	1 (0.7%)	62 (42.8%)	40 (27.6%)	25 (17.2%)	15 (10.3%)	3 (2.1%)
⑪ 先生とともに授業や保育をした	61 (42.1%)	46 (31.7%)	23 (15.9%)	13 (9.0%)	2 (1.4%)	30 (20.7%)	54 (37.2%)	36 (24.8%)	22 (15.2%)	3 (2.1%)
⑫ 保育案や指導案を見る(作る)機会があった	9 (6.2%)	14 (9.7%)	26 (17.9%)	95 (65.5%)	1 (0.7%)	12 (8.3%)	37 (25.5%)	23 (15.9%)	70 (48.3%)	3 (2.1%)
⑬ 先生の会議(打ち合わせ)で指導方法を話し合った	4 (2.8%)	10 (6.9%)	27 (18.6%)	103 (71.0%)	1 (0.7%)	6 (4.1%)	10 (6.9%)	25 (17.2%)	101 (69.7%)	3 (2.1%)
⑭ 一斉保育や授業を1人で行う機会があった	7 (4.8%)	10 (6.9%)	22 (15.2%)	105 (72.4%)	1 (0.7%)	6 (4.1%)	10 (6.9%)	36 (24.8%)	90 (62.1%)	3 (2.1%)
⑮ 反省会やケース会議等に参加した	6 (4.1%)	19 (13.1%)	29 (20.0%)	90 (62.1%)	1 (0.7%)	5 (3.4%)	17 (11.7%)	27 (18.6%)	93 (64.1%)	3 (2.1%)
⑯ 学習に必要な環境づくり・教材づくりに関わった	51 (35.2%)	50 (34.5%)	26 (17.9%)	16 (11.0%)	2 (1.4%)	37 (25.5%)	33 (22.8%)	37 (25.5%)	34 (23.4%)	4 (2.8%)
⑰ 子どもの下校後、片付けや掃除等の仕事をした	87 (60.0%)	26 (17.9%)	7 (4.8%)	23 (15.9%)	2 (1.4%)	56 (38.6%)	37 (25.5%)	22 (15.2%)	26 (17.9%)	4 (2.8%)
⑱ 子どもの発達や生活の様子を教えてもらった	47 (32.4%)	60 (41.4%)	33 (22.8%)	4 (2.8%)	1 (0.7%)	59 (40.7%)	59 (40.7%)	20 (13.8%)	4 (2.8%)	3 (2.1%)
⑲ 教材や保育内容について具体的に教えてもらった	24 (16.6%)	32 (22.1%)	70 (48.3%)	18 (12.4%)	1 (0.7%)	19 (13.1%)	67 (46.2%)	40 (27.6%)	15 (10.3%)	4 (2.8%)
平均	56 (38.7%)	34 (23.2%)	24 (16.5%)	30 (20.7%)	1.4 (0.9%)	47 (32.3%)	40 (27.7%)	24 (16.5%)	31 (21.3%)	3.3 (2.3%)

まず、継続組／非継続組に共通する特徴をみておくと、1・2年次ともに、「①いろいろな子どもと関わった」「③先生の授業や保育の様子を見ることができた」「④休憩時に子どもと一緒に遊んだ」など、子どもとの交流や保育・授業の見学などを日常的に経験している学生が多く、およそ7～8割を占めている。他方、「⑬先生の会議（打ち合わせ）で指導方法を話し合った」「⑭一斉保育や授業を1人で行なう機会があった」「⑮反省会やケース会議等に参加した」など、保育・教育場面を主導的に担う活動や会議については、3～5%程度と日常的に経験する学生は極めて少ないことが分かる。この理由としては、学生が知識・技能的に経験の浅い1・2年次であるという点、そしてインターンシップ実習が資格・免許を取るために必要ないわゆる「本実習」と異なり、参画型より参加型の実習になる傾向が高い点などが考えられる。

次に、継続組／非継続組ごとの違いに注目してみると、1・2年次ともに、継続組の方がさまざまな活動を経験する機会が「多かった」と回答する割合が高いことがわかる。また、1年次から2年次にかけての変化としては、「多かった」とする回答は継続組／非継続組ともに減少傾向にあるが、「まったくなかった」は継続組では全体的に減少しているものの、非継続組では横ばいないし増加している項目も多く、違いがみられる。もちろん、学習経験については、当然ながら保育所・幼稚園・小学校といった種別の影響を大きく受けるものであり、項目によっては、継続組と非継続組の違いとして、また1年次と2年次の違いとして単純に比較することはできない。例えば、「⑧先生が保護者に対応する場面を見た」では、継続組／非継続組ともに2年次で経験頻度が低下しているが、これには1年次で保育所を選択する学生が多かったのに対し、2年次では小学校を選択する学生が大幅に増えたことが影響するものと考えられる。一般的に、保育所において保護者との接点は送迎時など日常的にあるが、小学校ではそれほど多くはないのである。また、「⑩先生とともに授業や保育をした」で似た傾向がみられるのも、同じ理由があるものと考えられる。

そこで以下、実習先の影響というよりむしろ、学生自身の実習に取り組む姿勢に左右されると推測される「⑤子どもへの対応に戸惑ったり悩んだりした」「⑥子どもへの対応について先生に相談した」の項目に注目し、継続組／非継続組ごとの違いについて具体的にみておくこととする。

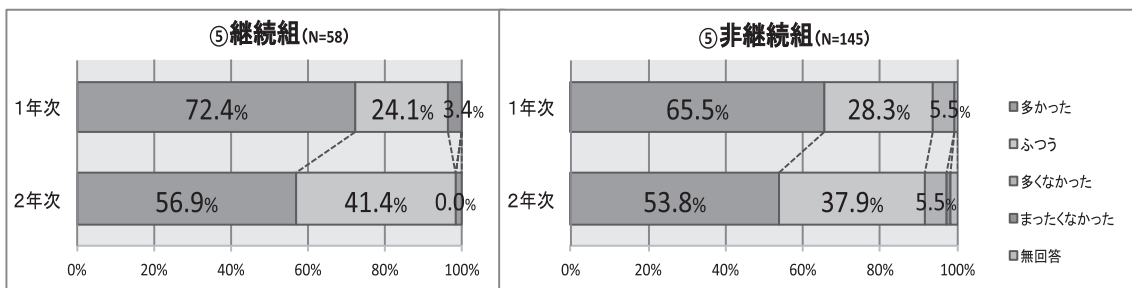


図3 ⑤子どもへの対応に戸惑ったり悩んだりした経験（継続組／非継続組別、学年別）

まず、「⑤子どもへの対応に戸惑ったり悩んだりした」についてみると、継続組／非継続組いずれにおいても、「多かった」が減少している（図3）。両者に共通して、2年次で

は現場に出ることに慣れ、子どもとの関わりにおいても、1年次ほど初歩的な困難さを感じなくなっていることが推測される。他方、両者の違いとして注目されるのは、2年次の継続組においては「多くなかった」「まったくなかった」が全くいないのに対し、非継続組ではむしろ1年次より微増し1割弱いることである。つまり、非継続組においては、1年間を通じて、子どもへの対応について戸惑い、悩む経験をあまり／まったくしていない学生が1割弱いるということである。これについては、現場で起こっている事象を十分に観察・考察するだけのスキルが未熟であるためなのか、自分の知識・技能を客観視できていないためなのか、そもそもそうした姿勢を持ち合わせていないためなのか、ここで単純に答えを出せるものではないが、いずれにしても興味深い結果である。

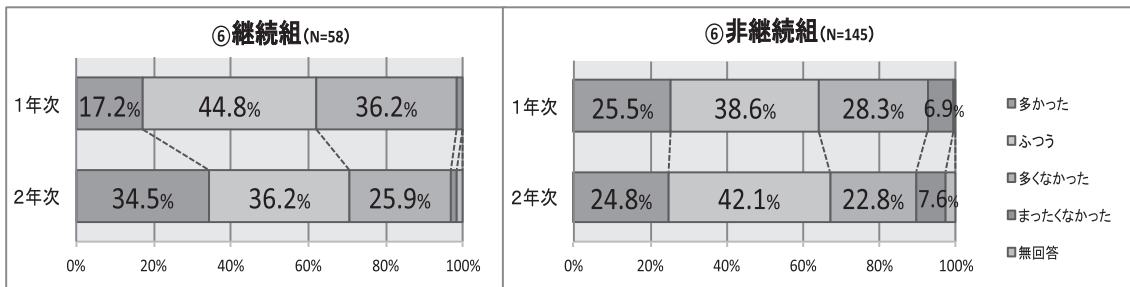


図4 ⑥子どもへの対応について先生に相談した経験（継続組／非継続組別、学年別）

「⑥子どもへの対応について先生に相談した」については、継続組では「多かった」とする学生の割合が2倍程度になっている（図4）。つまり、継続組においては、子どもへの対応で戸惑ったり悩んだりしてことについて積極的に解決しようとしている学生、また、先生の知恵から積極的に学び取ろうとしている学生が増えているのである。他方、非継続組においては、「多かった」がわずかながら減少しており、「まったくなかった」が1年次から引き続き一定数いることが注目される。これについては、非継続組の学生が、⑤でみたようにそもそも子どもへの対応で戸惑いや悩みを感じていないことや、相談できるほど先生と積極的な交流が図れていないことなどが推測できる。

以上、実習経験における継続組と非継続組の違いについては、実習先の影響を受けるため一概に語るができない部分はあるものの、全体として継続組の方が非継続組よりも多くの活動を経験する傾向が高いことが指摘できよう。また、非継続組においては、全体的な傾向としても、自分の裁量である程度経験が重ねられる項目に限ってみても、「まったく経験しなかった」とする層が学年を通じて一定数いる点が注目される。状況を打開しようとしたり、さらに多くのことを吸収しようとするなどの、前向きな変化が見えにくい結果であったといえる。

3 学習成果

次に、学生個々人が1年間のインターンシップ実習を通じて実感している学習成果（「実習を通して『理解した・身についた』と思うこと」）についてみていきたい。質問は11項目であり、回答の選択肢は「とても思う」「ふつう」「あまり思わない」「まったく思わない」の4項目となっている。表5・表6はそれぞれ、継続組と非継続組の回答結果を学年別に

表5 継続組、インターンシップ実習を通して「理解した・身についた」と思うこと (学年別)

(N=58)(単位:人)

	1年次					2年次				
	とても思う	ふつう	あまり 思わない	まったく 思わない	無回答	とても思う	ふつう	あまり 思わない	まったく 思わない	無回答
① 子どもの特性や生活の様子を学んだ	48 (82.8%)	10 (17.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	49 (84.5%)	8 (13.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
② 守秘義務の必要性を学んだ	31 (53.4%)	24 (41.4%)	3 (5.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	43 (74.1%)	14 (24.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
③ 保護者への対応で初期対応の大切さを学んだ	17 (29.3%)	27 (46.6%)	9 (15.5%)	5 (8.6%)	0 (0.0%)	17 (29.3%)	28 (48.3%)	9 (15.5%)	3 (5.2%)	1 (1.7%)
④ 実習先と他の機関・施設との連携について学んだ	11 (19.0%)	27 (46.6%)	16 (27.6%)	4 (6.9%)	0 (0.0%)	26 (44.8%)	20 (34.5%)	9 (15.5%)	2 (3.4%)	1 (1.7%)
⑤ 先生(将来)としての適切な言動や支援の仕方を学んだ	44 (75.9%)	12 (20.7%)	2 (3.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	45 (77.6%)	11 (19.0%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
⑥ 実習先の運営方針に沿って行動できた	33 (56.9%)	22 (37.9%)	2 (3.4%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)	30 (51.7%)	25 (43.1%)	2 (3.4%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
⑦ 実習先の先生や職員の人と積極的に関わった	29 (50.0%)	23 (39.7%)	6 (10.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	29 (50.0%)	27 (46.6%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
⑧ 実習先の先生や職員に人と適切な言葉遣いで話すことができた	39 (67.2%)	17 (29.3%)	2 (3.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	40 (69.0%)	17 (29.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
⑨ 自分なりの目標をもって実習をおこなった	35 (60.3%)	19 (32.8%)	4 (6.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	31 (53.4%)	25 (43.1%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
⑩ 学んだことを具体的に実習記録に記録できた	28 (48.3%)	24 (41.4%)	6 (10.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	32 (55.2%)	21 (36.2%)	4 (6.9%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
⑪ インターンシップを経験して自分自身成長した	46 (79.3%)	12 (20.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	45 (77.6%)	12 (20.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)
平均	19 (32.8%)	11 (19.7%)	2.6 (4.5%)	0.5 (0.9%)	0 (0.0%)	20 (35.1%)	11 (18.9%)	1.4 (2.5%)	0.3 (0.5%)	0.6 (1.0%)

表6 非継続組、インターンシップ実習を通して「理解した・身についた」と思うこと (学年別)

(N=145)(単位:人)

	1年次					2年次				
	とても思う	ふつう	あまり 思わない	まったく 思わない	無回答	とても思う	ふつう	あまり 思わない	まったく 思わない	無回答
① 子どもの特性や生活の様子を学んだ	102 (70.3%)	38 (26.2%)	4 (2.8%)	0 (0.0%)	1 (0.7%)	91 (62.8%)	51 (35.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (2.1%)
② 守秘義務の必要性を学んだ	66 (45.5%)	63 (43.4%)	15 (10.3%)	0 (0.0%)	1 (0.7%)	72 (49.7%)	60 (41.4%)	10 (6.9%)	0 (0.0%)	3 (2.1%)
③ 保護者への対応で初期対応の大切さを学んだ	46 (31.7%)	52 (35.9%)	33 (22.8%)	12 (8.3%)	2 (1.4%)	38 (26.2%)	61 (42.1%)	33 (22.8%)	10 (6.9%)	3 (2.1%)
④ 実習先と他の機関・施設との連携について学んだ	38 (26.2%)	57 (39.3%)	37 (25.5%)	12 (8.3%)	1 (0.7%)	34 (23.4%)	68 (46.9%)	33 (22.8%)	7 (4.8%)	3 (2.1%)
⑤ 先生(将来)としての適切な言動や支援の仕方を学んだ	99 (68.3%)	41 (28.3%)	3 (2.1%)	1 (0.7%)	1 (0.7%)	88 (60.7%)	51 (35.2%)	3 (2.1%)	0 (0.0%)	3 (2.1%)
⑥ 実習先の運営方針に沿って行動できた	48 (33.1%)	86 (59.3%)	10 (6.9%)	0 (0.0%)	1 (0.7%)	39 (26.9%)	86 (59.3%)	17 (11.7%)	0 (0.0%)	3 (2.1%)
⑦ 実習先の先生や職員の人と積極的に関わった	64 (44.1%)	64 (44.1%)	15 (10.3%)	1 (0.7%)	1 (0.7%)	64 (44.1%)	65 (44.8%)	13 (9.0%)	0 (0.0%)	3 (2.1%)
⑧ 実習先の先生や職員に人と適切な言葉遣いで話すことができた	79 (54.5%)	59 (40.7%)	5 (3.4%)	1 (0.7%)	1 (0.7%)	74 (51.0%)	65 (44.8%)	2 (1.4%)	0 (0.0%)	4 (2.8%)
⑨ 自分なりの目標をもって実習をおこなった	62 (42.8%)	68 (46.9%)	11 (7.6%)	3 (2.1%)	1 (0.7%)	60 (41.4%)	71 (49.0%)	10 (6.9%)	0 (0.0%)	4 (2.8%)
⑩ 学んだことを具体的に実習記録に記録できた	47 (32.4%)	64 (44.1%)	28 (19.3%)	5 (3.4%)	1 (0.7%)	42 (29.0%)	64 (44.1%)	31 (21.4%)	5 (3.4%)	3 (2.1%)
⑪ インターンシップを経験して自分自身成長した	112 (77.2%)	26 (17.9%)	4 (2.8%)	1 (0.7%)	2 (1.4%)	88 (60.7%)	50 (34.5%)	4 (2.8%)	0 (0.0%)	3 (2.1%)
平均	40 (27.7%)	33 (22.4%)	8.7 (6.0%)	1.9 (1.3%)	0.7 (0.5%)	36 (25.0%)	36 (25.1%)	8.2 (5.7%)	1.2 (0.8%)	1.8 (1.3%)

一覧にしたものである。

まず、継続組／非継続組に共通する特徴をみておくと1・2年次ともに「①子どもの特性や生活の様子を学んだ」「⑤先生(将来)としての適切な言動や支援の仕方を学んだ」を「とても思う」とする学生が7割前後と、基礎的な知識・技能の習得を積極的に評価する学生が多くなっている。また、「⑪インターンシップを経験して自分自身成長した」についても、7割前後の学生が「とても思う」としており、総合的な評価も高いといえる。他方、「③保護者への対応で初期対応の大切さを学んだ」「④実習先と他の機関・施設との連携について学んだ」「⑩学んだことを具体的に実習記録に記録できた」については、いずれも2～3割程度の学生が「あまり思わない」「まったく思わない」と消極的な評価を行なっている。③④については、現場に出たばかりの段階では経験・理解することが難しい問題

であること、⑩については、日々の現場実習を終えた後に各自でモチベーションを保って取り組むことが難しいことなどが推測される。

では、継続組と非継続組では、学習成果の感じ方はどのように異なっているのだろうか。全体的な特徴としては、全ての項目で継続組の方が学習成果を強く実感している割合が高く、非継続組が低くなっていることがみてとれる。また、1年次から2年次への変化に着目すると、継続組と非継続組の「とても思う」といった積極的評価の割合は、継続組では半数以上の項目で上がっているが、非継続組では多くの項目で下がっている。つまり、継続組は学習成果について手ごたえを感じる学生が増えているのに対し、非継続組については軒並み減っているのである。これについては、非継続組の学生は、全てが目新しい1年次の実習とは異なり、ある程度状況がつかめた段階からステップ・アップを図ることが難しい状況にあることが推測される。1年次から2年次にかけて「とても思う」の割合を最も下げているのが「⑪インターンシップを経験して自分自身成長した」であることは(16.5ポイント減少)、その最たる例といえよう(図5)。

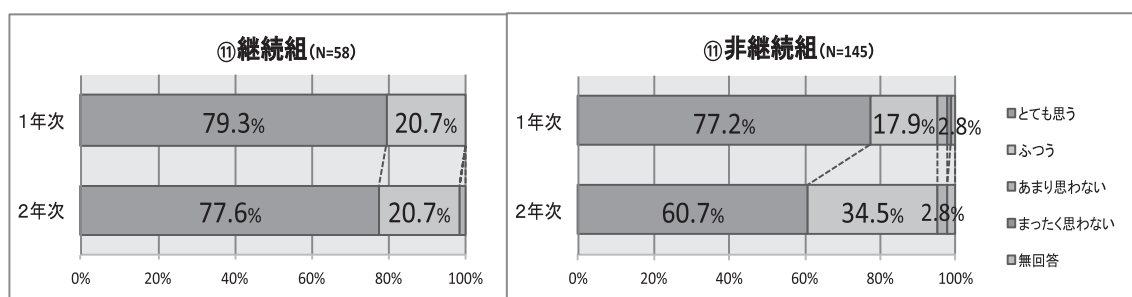


図5 ⑪インターンシップを経験して自分自身成長した (継続組／非継続組別、学年別)

そのほかにも継続組／非継続組で違いが大きな項目をみてみると、「④実習先と他の機関・施設との連携について学んだ」では、1年次では非継続組の方が「とても思う」と積極的に評価している割合が高いが、2年次では継続組が割合を伸ばし、結果的に非継続組を大きく上回っている(図6)。表5・表6にもあるように、同項目について積極的に評価する割合は1年次では全項目中最も低く、現場に出たばかりの段階では理解が難しい事がらといえる。そうした項目において2年次で大きな差がでたということは、継続組の視野の広がりや積極性を少なからず示すものと考えられよう。

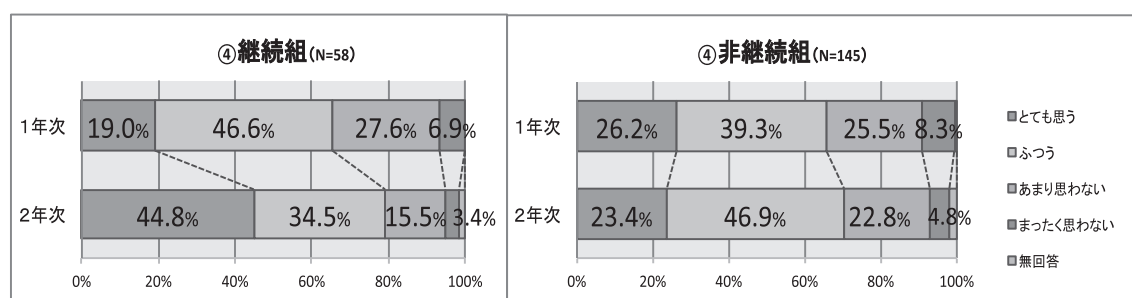


図6 ④実習先と他の機関・施設との連携について学んだ (継続組／非継続組別、学年別)

また、「⑩学んだことを具体的に実習記録に記録できた」については、継続組と非継続組とで評価の積極性に大きな違いがみられる（図7）。継続組では1年次の段階から半数の学生が「とても思う」と積極的に評価しているのに対し、非継続組では逆に「あまり思わない」「まったく思わない」と消極的に評価する学生が2割超と一定数存在している。2年次になるとこの傾向はさらに強まり、継続組で積極的評価が増え、消極的評価が減る一方で、非継続組ではまったく逆の現象が起こっている。こうした結果をみると、非継続組では2年間、記録をとることの意義や手応えを実感できず、苦手意識を引きずったままの学生が少なからずいるものと推測されよう。周知の通り、保育・教育職においては特に、日々の記録や指導案、連絡帳や報告書など「書く」というスキルは必要不可欠なものであるが、ここに「負担感」を抱き続ける学生にどう対応していくかは、継続性を支える意味でも大きな鍵になるといえるだろう。

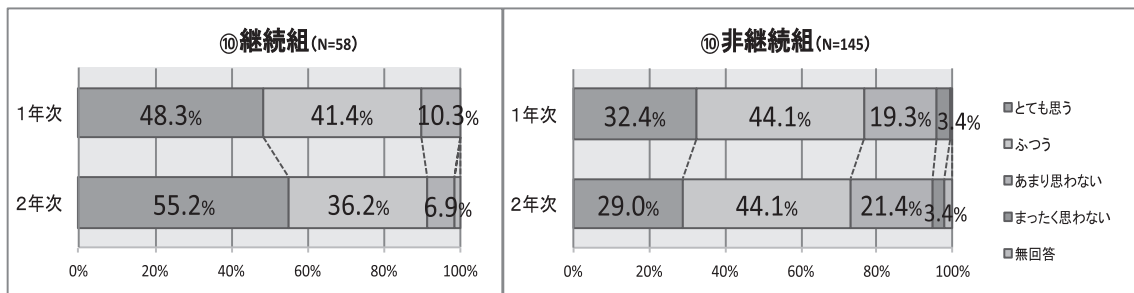


図7 ⑩学んだことを具体的に実習記録に記録できた（継続組／非継続組別、学年別）

以上、学習成果については、実習経験よりさらに継続組／非継続組で違いがみられたといえる。全体として、継続組の方が成果を実感する傾向が強く、2年次にかけての変化をみても多くの項目で積極的評価を増やす傾向にあった。他方、非継続組では変化が鈍く、項目によっては消極的評価をさらに増やす結果となっていた。

IV おわりに

本論では、長期的インターンシップ実習の継続性／非継続性の要因について、縦断的アンケート調査の結果から比較検討を行ってきた。最後に、学習支援という観点をふまえて、本論で得られた知見をまとめておきたい。

継続組と非継続組の違いとして第一に挙げられるのは、継続組の方が多くのことを経験し、学習成果を強く実感する傾向が高いという点である。第二に、1年次から2年次への変化という面では、継続組では前向きな変化がみられる傾向が強いが、非継続組においてはそうした変化がみられにくいという点である。特に学習成果に関しては、継続組はよりいっそう手ごたえを感じる学生が増えているのに対し、非継続組については軒並み減っていた。さらにいえば、継続組の場合は、1年次は積極的評価が低かった項目も2年次になると改善される傾向にあったが、非継続組では改善がみられにくく、むしろさらに消極的に評価する傾向にあった。

これらの結果を総合して考えると、継続組の学生は、いわば自分で学びのサイクルを作

ることができているといえよう。たとえば、実習記録を例にとってみても、記録という行為を通して1日をふりかえり、到達点や課題を明らかにし、その考察を次の実習場面で行動に生かす、といった一連の流れがある程度できているものと考えられる。なお、学生自身はこうした学びのサイクルにあまり自覚的でないと思われるので、形成的な評価を行なうなど、意識化をうながすような支援が適宜必要であろう。そうすることで、学生も記録に対し、自身の認識変容・行動変容につながる行為として、より前向きに取り組むことができるはずである。もちろん、こうしたサイクルは記録に限らず、あらゆる困難に直面したときに効果を発揮するであろう。

他方、非継続組の学生の結果からは、上述の実習記録など、一度困難さを感じたものに対してなかなか打開策が打てず、次のステップに進めていない様子が見える。これについては、知識の伝達や技術的な指導にとどまらず、「何のために書くのか」といった動機付けを繰り返し丁寧に行ない、ある程度学びのサイクルができあがるまで下支えする必要があるだろう。また、非継続組においては、全体的に評価の変化が鈍いことから考えても、自分自身の一定の思考パターン、行動パターンから抜け出せないでいる学生が多いことも推測される。そうした学生が視野を広げるにはやはり、多様な他者（現場の先生方など）と関わりをもつようながすことが有効であろう。ちなみに、冒頭で言及した保育者の就労実態に関する調査では、離職理由として職場の人間関係を挙げる人の割合はかなり高く⁵⁾、学生の多くにとっても就職後に直面する課題となることは容易に推測できる。そういう意味でも、目の前の子どもと関わることだけ、一人で試行錯誤することだけが現場での活動ではなく、先生方と豊かな関係性を築くことが結果的に自分自身の「動きやすさ」や成長につながることを、実習の段階で十分に実感させることが重要といえるだろう。

以上、長期的インターンシップ実習の継続組／非継続組の特徴とその学習支援について考えてみたが、今後の課題としては、引き続き継続的な調査を行い、4年次以降の継続性や就職後の動向などとも関連させて検討していくことが挙げられる。また、インターンシップ実習にとどまらず、いわゆる「本実習」や他の授業、ひいては生活面にいたるまで広がりをもった分析ができれば、より実態に即した要素を抽出することができるだろう。これらの作業を通じて、保育・教育者が生涯にわたるキャリアを展望できる学習支援のあり方について、考察を深めていきたい。

註

¹⁾ 全国保育士養成協議会専門委員会編著『保育士養成資料集 第50号「指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査」報告書Ⅰ』全国保育士養成協議会、2009年。そのほか、保育者の早期離職に関する調査としては例えば、森本美佐ら「新人保育者の早期離職に関する実態調査」『奈良文化女子短期大学紀要』（第44号、2013年、pp.101-108）、加藤光良ら「新卒保育者の早期離職問題に関する研究Ⅰ～幼稚園・保育所・施設を対象とした調査から～」『常葉学園短期大学紀要』（第42号、2011年、pp.79-94）など数多く存在している。

²⁾ 文部科学省『平成25年度学校教員統計調査（中間報告）』
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kyouin/kekka/k_detail/1349035.htm（2014年9月3日閲覧）など。

³⁾ 同大学のインターンシップ実習の趣旨について詳しくは、山崎高哉「理論と実践との融合をめざす

教員養成－大阪総合保育大学の挑戦を中心に－」『大阪総合保育大学紀要』（第8号、2013年、pp.45-68）を参照のこと。

- 4) インターンシップ実習について、文部科学省の調査によると、2011年度の大学での実施率（単位認定を行っており、特定の資格取得に関係しないもの）は70.3%であり、大学教育の取り組みとして定着しつつあるといえるが、学生の参加率は2.2%であり、広く普及しているとは言い難い。同調査から最も平均的な実施状況をみてみると、実施する学年は、大学3年次が全体の6割強と圧倒的に多く、ある程度具体的な進路を見据えた段階での実施がうかがえる。実施期間は、1週間～2週間未満が約4割で最も多く、1週間未満と2週間～3週間未満がそれぞれ約2割と続いており、比較的短期間での実施が主流となっている。実習時期は夏期休業中が、実習先は企業がそれぞれ全体の約6割と最も多くを占めている。なお、同調査では、「単位認定を行なう授業以外のインターンシップ」についても調査が行われているが、それによると、大学での実施率：65.1%、学生参加率：1.0%、実施学年：3年次6割強、実施期間：1週間未満4割強、1週間～2週間未満4割弱となっており、学生参加率がさらに低く、期間もさらに短くなってはいるものの、おおむね単位認定を行なっているものと同様の傾向にあるといえる。つまり、現在の大学教育のインターンシップの平均的な形態は、3年次の夏休みを利用した企業における2週間程度の就業体験、とイメージすることができるだろう。また、参加学生数も極めて低い状況にあるのである（文部科学省「大学等における平成23年度のインターンシップ実施状況について」

http://www.jasso.go.jp/career/documents/internship_mext20130628.pdf(2014年9月3日閲覧)。

- 5) 全国保育士養成協議会専門委員会編著、前掲報告書。

How Do Early Childhood Education Majors Continue to Study in the Long-term Internship Program?

Tomoko Saeki

Osaka University of Comprehensive Children Education

This paper describes the factors that are specific to early childhood education majors who continue to study in the long-term internship program. In particular, in one university where the internship program changes from the required course to the elective one when becoming the junior year, I compared students who continued to study with those who did not, especially about their internship's experiences and learning outcomes. According to the results of the longitudinal questionnaire survey, it was firstly found that the former had more experiences and learning outcomes than the latter. Secondly, while the former changed more positively on the end of the sophomore year than the freshman, the latter showed little change.

Key words : training for childcare workers and elementary school teachers, long-term internship program, continuity/ non-continuity